

Title	Franz Schnabel. Zu Leben und Werk (1887-1966). Vortrage zur Feier seines 100. Geburtstages. Herausgegeben von der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. Munchen 1988.
Sub Title	
Author	東畑, 隆介(Tohata, Ryusuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.67, No.1 (1997. 9) ,p.187- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970900-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Franz Schnabel. Zu Leben und Werk (1887-1966).

Vorträge zur Feier seines 100. Geburtstages.

Herausgegeben von der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. München 1988.

東畑隆介

フランツ・シュナーベルの名前は、我が国のドイツ近代史の研究者の間でよく知られている。主著『一九世紀ドイツ史』は、同じ時期を扱ったトライチユケの名著とともに一九世紀ドイツ史の古典となっている。しかしそれから一步踏み込んで彼の学問・業績を問題にしようとする、それらは殆ど知られていないと言っても過言ではない。彼のライフワーク『一九世紀ドイツ史』四卷二

一二五頁を通読した人は殆どいないであろうし、その他の著書(註)についても、それらが我が国の研究者に馴染みの薄い対象を論じているということもあって殆ど知られていない。我が国の研究者に知られている唯一の対象と言えるものにシュタインの伝記 (Freiherr vom Stein, 1931) があるが、我が国のシュタイン研究でこの書物

を引用している文献は、私の知るかぎりでは皆無である。従ってシュナーベルの生後一〇〇年を記念してバイエルン科学アカデミー歴史委員会によって刊行されたこの書物は、我が国で名前のみ有名で、殆ど知られていない近代ドイツ史の巨匠の生涯と学問について啓蒙的な役割を果たすものと思われる。

この書物には、冒頭のバイエルン学問・芸術相のヴィルト (Wolfgang Wild) の挨拶の言葉に続いて三人の門下生——ベッケンフェルデ (Ernst-Wolfgang Böckenförde)、ヴァイス (Eberhard Weis)、アングーマン (Erich Angermann) ——の講演が収録されている。

まずベッケンフェルデは、「フランツ・シュナーベルの思い出」と題する講演で、一九五〇—五一年の冬学期

の講義を通してのシュナーベルとの出会いを以下のように記している。シュナーベルの講義の巨大で比類のない影響力、学生に対するその魅力的な力は、彼の透徹力のある概念、それによって仲介された洞察、知識を単純化する老練な教師の才能によるものであり、すべての樹木が同時に光に晒されず、多くは故意にフェードアウトされたにせよ、我々学生は森を見ることを学んだと述べている。個人的な会話で未完の一九世紀ドイツ史が話題になったとき、シュナーベルは、「学生への教授が自分の本を書くことよりも社会的に必要である。」「私がここで私のドイツ史の仕事を続けたいだろうことは、ミュンヘンへの招聘を受諾したときに明らかであった」と答えている。定年退職の年齢に達した一九五五年以後、彼は著作の完成のためにその権利を行使せず、一九六二年、七五歳になって漸くその権利を行使した。

一九五六一七年に聴講した講義のテーマは、国民国家の運動の歴史だった。このテーマは公刊されなかった『一九世紀ドイツ史』第五巻のテーマであった。シュナーベルは、ここで我々に未完ではあったが、遺産を残した。それは、研究の一層の進展とナシヨナリズムとその歴史を歴史的に回顧して書かれたオイゲン・レンベル

ク (Eugen Lemberg) の重要な著作のような後年の叙述によって決して凌駕されなかった。それ故に「この遺産は、専門の歴史家の懸念にもかかわらず、然るべき形で我々すべてに入手可能にされるべきではないだろうか」という提案で彼の回想を結んでいる。

次にヴァイスが、「フランツ・シュナーベルの生涯と人格」と題する講演で、彼の生涯と業績を以下のように述べている。シュナーベルの成長の歩みにとって、彼がドイツ西南部の市民の出身であることと母親から受け継いだカトリックの信仰とフランスから得た精神的刺激が重要である。ベルリン、ハイデルベルク両大学での歴史とロマン主義の学習後、一九一〇年にヘルマン・オンケン (Hermann Oncken) 教授の指導の下で「一八四八年のドイツにおける政治的カトリック主義の連合」という研究 (一九一〇年に著書として刊行) によって学位を授与された。学位論文のテーマから推察し得るように、彼はヨーロッパ史におけるキリスト教の基本的意義を認めたいし、『一九世紀ドイツ史』の第四巻が示すように、新旧両宗派に等しく親しみを感じていた。一九一〇年以後の一二年間のギムナジウムの教師時代を経て、一九二二年に教授の資格を得て、カールスルーエ技術大学の正

教授となった。技術大学での活動を通して彼は、ヨーロッパの精神史・文化史からの自然科学と技術の発展と世俗的な変化の過程へのそれらの貢献を研究し、叙述する主要な刺激を得た。彼の死の四年前の、一九六二年に、新聞でのインタビューで、ある技術者が彼に「我々は因果性の世界の中に生きている」から、「それに従って歴史の進行を決定できる公式を発見」してほしいと言ったとき、彼は、「人間の意志の自由が作用している世界があることを歴史家として示そうとした」と、語っている。

一九三二年七月の帝国宰相パーペンによるプロイセン・クーデタに対してシュナーベルは、「Hochland」と「Badische Beobachter」に発表した「新ドイツ帝国の改革」と題する論説で、ドイツ国家の成長の基礎となっていた法治国家と連邦国家という二重の特徴を除去したことは、一九一八年一月の革命以上の大きな由々しい過去との断絶であると警告している。この騒然とした危機の時代である一九二九年から三七年に至る八年間に主著『一九世紀ドイツ史』四巻が刊行された。第二巻「君主制と人民主権」は、ヒトラーの政権掌握後に出版されたが、「ドイツ国民は、二〇世紀において築かれねばなら

ない新しい生活においてもドイツ国家とドイツ精神の偉大な伝統を否定しはしないであろう。過去の真の価値は一時的に曇らされるかもしれないが、決して根絶されることはできない」と述べられているように、ヒトラーの政権掌握という事件は、この書物の内容にいささかも影響を及ぼさなかった。一九三四年に刊行された第三巻「経験科学と技術」は、その序文において、ブルジョアジーがその共通の担い手である憲法思想、経験科学及び近代技術の不可分の結合が指摘されているが、これは当時の独裁者の目には極めて望ましくないテーマであった。一八四八年以前のカトリック主義とプロテスタンティズムを扱った第四巻の公刊に先立つ一九三六年に、シュナーベルは政治的な理由から強制的に退職させられた。一九三九年に原稿の形で彼が仕上げた第五巻は、ヒューマニズムの時代から一八四八―一九年の革命の前夜までのドイツにおける国民の理念と国民の問題を扱っている。この巻も国民社会主義のイデオロギーと政治に何らの譲歩もしなかった。その前の四巻の迅速な流布と成功に驚かされた帝国宣伝省の検閲官庁は、一九四一年に第五巻の刊行を禁止し、印刷済みの部分は破棄された。

終戦後、アメリカに占領された北バーデンの「州教

育・文化長官」（一種の文部大臣）として一九四七年まで教育制度の再建に盡力した後、ミュンヘン大学に招かれ、六〇歳から七五歳（一九六二年）まで教授活動に従事した。この時期の時間と労力の主要部分は、教授、学生、無数の試験・ゼミナールの仕事に目を通すことに費された。

最後にある種の分裂が、『一九世紀ドイツ史』やその他のシュナーベルの著書に見出される。一方では、彼の研究は、人道主義的、自由主義的、立憲国家的な理想主義、西欧的伝統の中にあるドイツ民主主義の強化への努力によって貫かれている。他方において彼は、一九世紀の半ば以来、文化、人間性、法治国家が益々文化の原子化、精神のない官僚化と二〇世紀の大衆の扇動的な操縦と誘惑の増大する危険に陥るのを見ることが指摘されている。

『英知と雄弁』——フランツ・シュナーベルの歴史叙述についての考察——と題する講演で、アンガーマンは、シュナーベルの歴史的著作の「すべてを結びつけ、全体を特色づける」「赤い糸」として人道主義的な教養理念を挙げ、彼の著作を通してそれを解明している。

一九二三年一月一八日にカールスルー工技術大学の学

生に對して行つた「現在の歴史研究の意味について」という講演で、シュナーベルは、「その学問と研究の本来の使命に不忠実になることなく、国民の政治的教育者として活動」することに歴史家の使命があると述べている。このような国民の政治教育者としてシュナーベルは、一九三二年七月のフランツ・パーペンのプロイセン・クーデタを、『Hochland』に掲載された論説でドイツ立憲主義国家の二つの根本原理である法治国家と連邦主義に對する許し難い違反として糾弾した。これが遠因となつて一九三六年に教職を剝奪され、『一九世紀ドイツ史』の続巻の刊行を禁止された。一九三〇年代にシュナーベルは、彼の政治的体験或いは近代国家の發生についての研究或いはこれら二つの諸要素に基づいて「国民の政治的教育者」という責務からそれ自身のための人間の教育の中に同時に共同体にとつての最高の利益を認める教育理念への道を見出した。以下においてシュナーベルの「スケールの大きな歴史叙述」へのこの理念の影響を辿ると、ヒューマニズムの歴史家シュナーベルを特徴づけるものとして次の三つの観点を挙げる事ができる。すなわち彼の歴史叙述を決定する形成原理、素材の選択に関する決定的な観点と叙述において表現される価値観と手段

である。

シュナーベルの著作の読者や彼の講義の聴講者は、複雑な史的現象と諸關係に精神的に浸透し、それらをより大きな關係の中に置き、個人の業績、社会の發展或いは物質的な変化の形で具体的に説明する彼の非凡な才能に注意を引かれた。歴史家は、本質的なものへの強い集中を必要とする。レオポルト・ランケの歴史理論、とりわけ歴史叙述に依拠して、シュナーベルは、歴史的に有効になる精神的な力の自己發展を、その社会的影響の考察において正当に評価しようと試みた。「私は生のすべての領域の内的な絡み合いを研究・叙述して、大まかにヨーロッパ人とドイツ人の伝記を与え、ヨーロッパ文化、とくにドイツ国民の現在の状況を歴史的に解明すべく努力してきた。私は、そうでなければ我々の歴史書に見出されない多くの問題と対象を取り上げねばならなかった」と、『一九世紀ドイツ史』第一巻の緒言で述べているように、本質的なものへの限定は、伝統的な国家史に対して視野の巨大な拡大をもたらした。

シュナーベルの歴史思想を規定したものに、歴史の發展は、決して元の方向に向けられないという認識がある。彼にとって「歴史における復旧は存在し」得なかった。

むしろ運動は常に一層進まねばならない。何故ならすべての時代は、自らの中にその克服の胚芽を蔵しているからである。シュナーベルの歴史思想のもう一つの特徴は、ヨーロッパ諸国民の創造的な一層の發展は、近代世界の合理主義、魔術からの解放への強過ぎる傾向と並んでその中にヨーロッパ文化の精神力 (Seelenkräfte) とその「非合理的な底流」とが作用する偉大な指導者の個性の自發性、熱狂の能力と献身とが繰り返し登場したときのみ考えられるという信念である。

素材の選択の観点の下で彼の叙述を特色づけている特徴として、応用科学としての近代の科学、技術と一般的歴史的發展、すなわち近代の社会的、倫理的、政治的運動とを結びつけるシュナーベルの比類のない能力が挙げられる。『一九世紀ドイツ史』第二巻において立憲主義、国民運動、自然科学は、皆一つの精神的土壌に由来していた。何故なら「ブルジョアジーは、憲法思想、経験科学、近代技術の担い手であった。従って形式的な法治国家の世紀は、同時に歴史的感覺を生み出した時代にもなった。そしてそれは、少なからず自然科学的な時代であった。これらすべては、極めて緊密に互いに補い合つて一つの全体を形作っており、互いに解き難く結合して

いるからである」。けれども一九三三年には、「科学と技術によつて解き放たれた力が、嵐のように前進して絶対的な妥当性を追求し、その意味すら根絶しそうになると、ドイツにおいては、古い真の市民文化の抵抗力は、余りにも弱いことが明らかになった。ドイツの自由主義的ブルジョアジーがそれに基づいていた基盤は消えてなくなった。その崩壊はもう時間の問題にすぎない」と述べている。

「知識階級が彼等の言葉と意見とを聖書によつて強化することなしに敢えて書き、印刷したとき、ドイツ的教養の危機は、その決定的な段階に至つた。それは人間の人格の宗教的な部分の恣意的な断念であつた。ドイツ的教養の未来についての決定は、世紀の中頃にはもう示されていた。上層階級は、古い統一的・包括的な国民の教養を捨てて、国民の生活の共通のキリスト教的基盤を離れた。」

生涯の最後の二〇年間に彼を益々それに従事させたように思われるのは、「その中で因果律が支配する……：世界と並んで、その中に人間の自由と尊厳に基づいており、歴史においてそれを手に入れようと努力されるもう一つの世界がある」という彼の講演と著書に繰り返し現れる

思想である。単なる合目的々な思想、唯物論、合理主義が自発性、人間的連帯感、全体としての人間の生活の創造的な豊かさに対して完全に優位を占める場合は、全力をもつて抵抗することが必要である。それは人道主義的教養の大きな使命であつたし、「あらゆる生活領域の内的なからみ合い」を視線に入れ、「目的と価値及び全体との関連を問う」「大規模な歴史叙述」の大きな使命であつた。それでもつてシュナーベルの歴史思想にとつて中心的な意義を持つテーマ——現代の大衆社会による個々の人格とその本質的な価値に基づく個性と自由の危機——が触れられている。「一九世紀ドイツ史」の第二巻において、彼はトクヴィルによつて提起された自由主義と民主主義の関係についての討議を取り入れた。冷静な歴史家であつたシュナーベルは、自由主義と民主主義の関係における矛盾をうまく処理することができたし、ヴァイマル共和国や連邦共和国の政治秩序を信念をもつて受け入れることができた。けれどもそのことは、近年益々特権的な少数者に限られた自由主義の政治的・論証的な弱さと人民主権の達成能力に基づく民主主義の原理の全体主義的な傾向、従つて自由・民主主義的な妥協の疑わしさへの彼のまなざしを遮りはしなかつた。晩年に

彼は、何度も繰り返して大衆社会の問題について語るようになった。このことは、何故、彼のライフワークが未完に終わったか、或いは未完に終わらざるを得なかったかという問いに導く。ロタール・ガル (Lottar Gall) が、一九六八年の彼の追悼の辞において「彼の中には、二つの潮流——信仰と普遍的な秩序の伝統、『古きヨーロッパ』の精神から育まれた一つの潮流と際限のない唯物論と盲目的な進歩の信仰において過去のすべての価値を一掃するもう一つの潮流——の余りにも強い両極化の危険がくつきりと浮かび上った」と述べたとき、彼は決定的な点を的確に指摘している。大衆の歴史への進出を「歴史的危機」と捉えたヤーコプ・ブルクハルトは、一八三〇年のフランス七月革命をヨーロッパの振動として一般的意義を持つ事件として観察した。シュナーベルもまた一八三〇年頃にすべての古い伝統がとぎれ、この世紀の本質を成す全く新しい現象が生じるのを見る。それに続いてマルクス主義、サンディカリズム、帝国主義、その起源から引きちぎられたナショナリズムなどの諸潮流が検討される。それと同時に世紀末の文化批判も「古きヨーロッパ」の社会的環境を再建できず、反対に非自由主義的・反法治国家的伝統をしばしば強める一方、弾劾

された諸現象が我々の時代にまで作用し続けたことが明らかになる。これらの指摘は、何故『一九世紀ドイツ史』が、第二次大戦後、その最初の構想の意味で完成されなかったかを理解させる。一九三七年までに計画された二巻が四巻となったが、一八四八年の革命にまで至らなかった。第五巻についても同様であろう。完成するには少なくとも七巻を要したであろう。このような大事業の達成は、六〇歳を越えた人には全く考えられなかったであろうし、シュナーベル自身もそれが可能だとは思っていなかった。人道主義的な人間形成の理念が、研究、叙述、教授における彼の歴史思想で益々重要になってきた場合、歴史叙述のライフワークの完成が殆ど克服できない内的、外的な抵抗に出会ったとき、そうでなくても熱心な大学の教師だった彼が、その後一段と個人的な教授に専念したことは、当然のことであつたらう。

しかしシュナーベルが、彼の大きな使命の増大する解決不能に甘んじることなく、一九世紀以外の時代の新しい課題を他の手段でもって正当に評価しようと試みたことは、熟考の価値があるように思われる。何故なら、このことが、初めて彼に彼の『一九世紀ドイツ史』によって開拓された大きな成果を授けたからである。彼自身が

「最高度に現実化したヒューマニスト」であつたが故に、これは可能となつた。時代の唯物論と集団主義へのあらゆる不安にもかかわらず、シュナーベルは、歴史の生き生きとした多様さとその引き続いての作用から得られた文化遺産への信念を破壊させなかつた。

上述したように、本書は三人の門下生が、彼等の師であるシュナーベルの学問、人柄を回想したもので、それぞれ興味深いが、とりわけアンガーマンのシュナーベルの業績を貫くヒューマニズムの精神、シュナーベルが大衆社会に対して抱いた危機感、それが彼のライフワークの完成を妨げた原因となつたという指摘は興味深く、シュナーベルの歴史叙述の根底にある思想の解明に寄与するものと思われる。唯欲を言えば、ランケから現代の社会史に至る史学史において彼の歴史学がどのような位置を占めるかという点に論及してもらいたかつた。科学と技術の問題を扱つた彼の『一九世紀ドイツ史』第三巻が、現代のドイツの社会史家にも高く評価されているだけに、この問題が取り上げられなかつたのが惜しまれる。

註

(一) 以下に彼の主要な著作を年代順に挙げる。

- Der Zusammenschluß des politischen Katholizismus in Deutschland im Jahre 1848, 1910
 Geschichte der Ministerverantwortlichkeit in Baden, 1922,
 1789-1919. Eine Einführung in die Geschichte der neuesten Zeit (als Schulbuch "Grundriß der Geschichte"), seit 1923 in vielen Auflagen
 Deutschland in den weltgeschichtlichen Wandlungen des letzten Jahrhunderts, 1925
 Sigmund von Reitzenstein. Der Begründer des badischen Staates, 1927
 Ludwig von Liebenstein. Ein Geschichtsbild aus den Anfängen des süddeutschen Verfassungslebens, 1927
 Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert
 Bd. I : Die Grundlagen, 1929
 Bd. II : Monarchie und Volkssouveränität, 1933
 Bd. III : Erfahrungswissenschaften und Technik, 1934
 Bd. IV : Die religiösen Kräfte, 1937
 Das Zeitalter Napoleons, 1799-1815, in : Propyläen Weltgeschichte, Bd. 7, 1929
 Das 18. Jahrhundert in Europa, in : Propyläen Weltgeschichte, Bd. 6, 1931
 Deutschlands geschichtliche Quellen und Darstellungen in der Neuzeit. 1. Teil : Das Zeitalter der Reformation, 1500-1550, 1931
 Freiherr vom Stein, 1931

- Der Buchhandel und der geistige Aufstieg der abendländischen Völker, 1951
- Der Aufstieg der modernen Technik aus dem Geist der abendländischen Völker, 1951
- Der Ursprung der vaterländischen Studien, 1951
- Das humanistische Bildungsgut im Wandel von Staat und Gesellschaft, 1955
- Die Idee und die Erscheinung, in : Die Historische Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften 1858-1958, 1958
- Alexander von Humboldt, 1959
- Abhandlungen und Vorträge, herausgegeben und eingeleitet von Heinrich Lutz, 1970